

KAGAWA GALAXY 吉田源治郎・幸の世界（142）

第142回 「吉田源治郎・吉田幸の世界」補遺（8）

今回の「補遺8」は、この連載の初めに紹介した大阪ボランティア協会の岡本栄一理事長が最近、大阪の福祉を知るみんなの情報誌「ウェルおおさか」の57号～59号（2010年8月～10月）に「四貫島セツルメントの基礎を築く—吉田源治郎の人となりと福祉思想」を連載されており、それを収める。

過日（2010年11月20日）神戸の賀川記念館に於いて開かれた「総合研究所連続研究会」で、岡本氏は「公共福祉論の視点から“なぎさ”論を考える」という興味深い報告をされた。その折りにこの連載でのアップを了承頂いた。少し文字は小さくなるが、次頁以下に3回分を掲載誌のまま取り出すことにする。

大阪の福祉の源流をたどる

福祉の歴史散歩



四貫島セツルメントの基礎を築く

～吉田源治郎の人となり福祉思想①～

本稿は三話完結の第一話です。

四貫島セツルメントは、2006(平成17)年に創立90周年を迎えました。現在、四貫島幼稚園、天使保育園、天使保育園北分園、特別養護老人ホーム、ガーデン天使の9施設が運営されています。

四貫島は「白旗成林」西丸集「新からみま」と、北西に位置します。創設時の大正初期の頃は工場が密集する労働者のまちで、当時は「男工」と呼ばれる男性の労働者が多く、労働者問題を抱えた一つの課題地区だったのです。吉田源治郎(以下吉田とする)は箕川豊彦(以下箕川とする)とともに、1925(大正14)年にここを舞台、セツルメントを創設したのです。

明治の終わりに頃から、大阪では民間を中心にセツルメント事業が立ち上がっていました。

最も古いのは、1909(明治42)年、愛染橋南中学校(後に石井記念愛染橋と改称)で、その後、1912(大正元)年に大阪自衛隊、1915(大正4)年に大阪地産校、1920(大正9)年に神志学園、1921(大正10)年に光徳寺学園、1923(大正12)年に基督教ミッド社会館と続きます。そして、民間セツルメントのうち7番目に設立されたのがこの四貫島セツルメントです。同年には、市岡善徳院、深川善徳院もスタートする等、セツルメント事業の全盛期に入っていました。

公立のセツルメントは、民間より少し遅れて1921(大正10)年に市立市民館(後の北市民館)の創設から始まり、天王寺市民館、浪速市民館、鶴橋市民館などが建設されています。

それでは、吉田の生い立ちと、吉田を中心とした四貫島セツルメントの歩みを振り返ってみま

す。吉田は、三國傳の宇治山田に生まれ、家が貧しいため1914(大正3)年に三穂町立第四中学校(現在の宇治山田高校)に5年遅れで入学、成績が優秀で特待生として卒業します。1918(大正7)年に明治学院神学部を卒業し、京都の伏見東教会の牧師になります。明治学院時代は内村鑑三との親交もありました。

妻と結婚後の1921(大正10)年に、帯貝で箕川と「イエスの友会」を結成します。この時の精神が、後の四貫島セツルメント創設にもつながります。吉田は、この「イエスの友会」結成の翌年から1926(大正14)年までアメリカに留学、オーボーン神学校等で学びます。

一方、箕川は1926(大正14)年1月に、アメリカのロスアンゼルス集会以「イエスの友会-ロスアンゼルス支部」を結成し、さらに「日本労働振興会社」設立支援を呼びかけ、ほろから多額の献金が捧げられます。

一方、吉田ですが、1925(大正14)年5月頃、ヨーロッパの社会や福祉の視察の帰途、ドイツのホテルで箕川と会ったのです。この年の10月に「四貫島セツルメント」がスタートするわけですから、おそらく、このドイツでの箕川との出会いでは、この新しいセツルメントをめぐり、構想を語り合ったことと思われます。

この年は2人にとってあわただしい年ですが、とりあらず1925(大正14)年10月1日、吉田を館長に、「日本労働振興会社-四貫島セツルメント」として2階建ての借家から出発。その2年後の10月1日、ロス献金をもとに、ボーリス設計により「天使会館-四貫島セツルメント」として本格的な地域活動が開始される

のです。

四貫島セツルメントでは、主に子供の保育・保健指導、労働者に向けた教育・福祉、消費者組合活動などに注力し、事業が盛んになっていきます。初期の事業では、珠算、英語教室などのクラブ活動を行います。力点があかれたのは、児童保育です。この児童福祉重視は今日まで継承されています。

1931(昭和6)年には、労働者の学習拠点として、労働学校→国民総合大学を開講します。この労働学校は労働者運動のほか、奈良等の農村セツルメントの関わりもなされます。1933(昭和8)年には、予防的観点から保健婦などによる乳幼児の健康相談がなされ、さらに、消費者組合活動のために「共済社」が結成されます。

ところが1934(昭和9)年9月の室戸台風により、四貫島セツルメントは壊滅。機関紙「流域」を発行したものの4年後に発行停止。1937(昭和12)年には日露事案が始まり、さらに労働者運動への弾圧も強くなり、事業は下向きとどります。1941(昭和16)年に太平洋戦争が勃発、四貫島セツルメントは四貫島友誼館へと名称変更を迫られ、全体主義により、教会の礼拝も、皇親御子の儀に準拠した「海行かば」を斉唱せられるようになるのです。

1945(昭和20)年に大阪空襲で、友誼館も例外なく、四貫島一帯は焦土と化します。吉田一家は、現在の華子園二業教会などに避難し、避難を遂げます。

戦後、吉田は友誼館館長、大阪四貫島教会牧師を辞任します。その後、長女の夫、小川三男牧師が引継ぎ、施設の一部と四貫島教会を建て直すなど再興に奮闘します。しかし、1960(昭和35)年にジョン・台風により再び水没破壊し、建て立てて小川は辞任。その後、箕川の紹介で小川秀一牧師が就任し、再興に向け、現在の四貫島友誼館の基礎をつくるのです。

吉田は、戦時中に避難した今津二業教会、西宮一史教会で教会活動に専念します。

※この稿は大阪市社会福祉局 情報センターで開催された「大阪の歴史市民講座」の講演(講師:岡本俊一 大阪ボランティア協会理事長(現ボランティア研究所所長))の聞き取りから抜粋したものです。

大阪の福祉の源流をたどる
福祉の歴史散歩



四貫島セツルメントの基礎を築く

～吉田源治郎の人となりと福祉思想②～

本稿は三話完結の第二話です。

四貫島セツルメントの歩みを概略述べてきましたが、その歩みの特徴は5つほどあります。

1つ目は、キリスト教伝道とセツルメント運動の一体化ともいえる特徴です。最初の頃は特に「伝道＝セツルメント」といったように両者は不可分離的でした。それは「イエスの友会」の綱領、「日本労働伝道会社・四貫島セツルメント」といった思想を受けています。

四貫島セツルメント創設の背景には「労働者伝道」や「イエスの友会」に対するロスアンゼルスへの信者の祈りと支援があり、その応答としてのセツルメント化があるのです。四貫島の施設には「天使」などという名前がつけられています。それは、支援のあったロスとの関係の深さを著わしています。

2つ目は、地域の人びとや労働者の人格的交流を重視した点です。人格的交流というのは、地域の人びとや労働者に金銭的支援をするのではなく、人格的な接触によるエンパワメント、すなわち生きる希望を分かちあおうとする考えかたです。吉田源治郎(以下、吉田とする)は、そこにセツルメントの本質があると考えました。そのため「早天基金」や「朝食会」などの交流活動をプログラム化することに力を注いでいます。

3つ目は、労働者問題や貧困問題への取り



組みです。菅川善彦(以下、菅川とする)自身、四貫島セツルメントの時代ですら、貧困を「労働問題」として構造的にとらえ、保育の問題についても「母親の仕事はどう支えるか」という視点で取り組んでいました。「労働問題を解決することが、すなわち福祉を解決すること」という考え方は、この点が、他のセツルメントにはない四貫島セツルメントの思想の独自性です。その証様に、河上肇などを講師に招き「労働問題研究会」を開き、西尾末広や大矢省三を招いて「労働問題討論会」を行っています。また消費組合運動も手掛けます。

4つ目は、保育などの児童問題への取り組みに見られるものです。1928(昭和3)年には、保育事業により、背後から婦人労働を支援するとともに、児童の健全育成を目指し、「天使保育学校」を開校、日曜学校を近隣6か所で開催したり、子ども会などを開きます。

この児童問題への取り組みは、天使保育園など、現在の児童館事業に引き継がれています。さらに、児童の健康・保健活動への先駆的な取り組みも特筆できます。1933(昭和8)年頃から、週1回の健康相談所の開設や保健訪問活動など先駆的に行っていることです。

5つ目は、度重なる災害や戦災の痛手を受けたこと。戦前には室戸台風、戦後にはジェーン台風と2回遭った。第二次大戦末期には空襲のため全焼しています。そのため残念ながら記録がほとんどありません。また、全体主義体制下の中、当局からの弾圧を受け、組織名称変更、労働運動の中止を余儀なくされます。

つぎに、菅川と吉田のつながり、吉田の活動について概略ふれておきます。

菅川は、神戸生まれで徳島育ち。明治学院

大学から神戸神学校にうつります。その頃、結核を患い、病苦による絶望の中で、神戸のスラムに住み込み救済活動を始めます。しかし奇跡的に回復します。

1914(大正3)年にスラムの救済活動に限界を感じ、アメリカへ留学。1917(大正6)年に帰国してからは、貧困を社会構造的な問題としてとらえています。1921(大正10)年に吉田らと「イエスの友会」を結成。1923(大正12)年、関東大震災の救済活動を契機に、「本所セツルメント」を設立します。このときの経験が四貫島セツルメント事業に活かされます。菅川は、四貫島の事業の地を吉田にまかせ、「救済から助産へ」をスローガンに労働運動、農民運動、普通選挙権獲得運動、生活協同組合などの先頭に立つのです。

菅川は、1910(明治43)年に「イエス団」を結成します。その9年後、吉田と菅川は1919(大正8)年に初めて出会いますが、1921(大正10)年の「イエスの友会」の結成過程で2人の深い関わりが生まれます。この運動は、キリスト教界に新風を巻き起こします。1922(大正11)年、吉田はアメリカに留学。一方、菅川は1925(大正14)年1月、「イエスの友会」ロスアンゼルス支団の結成と、日本での「労働者伝道」支援を呼びかけ、このロスアンゼルス講演で多額の献金を集めます。同年5月ごろと思われていますが、吉田は、ドイツのホテルで菅川と会い、その時、四貫島セツルメントの構想を練ったと思われます。ロスの人びとの祈りと多額の献金は、先にもふれたように、四貫島セツルメント創設の基礎となるのです。

吉田は、四貫島セツルメントの運動をメインとしつつ、西宮瓦木(後の一妻寮)において菅川、杉山元治郎とともに「農民福音学校」を開講したり、「双葉幼稚園」や「一妻保育園」の設立にも関わります。また、奈良馬見での労働教会や保育園等を支援し、菅川とともに農村セツルメントを構想しています。また、あまり知られていませんが、吉田は、ハーバード等宣教師とのつながりから、中村運の大阪水上院保健の創設の構想し役もします。

※この稿は大阪市社会福祉研修・情報センターで開催された「大阪の歴史市民講座」の講演(講師:岡本榮一 大阪ボランティア協会理事長(現ボランティアズム研究所所長))の聴き取りから整理したものです。



四貫島セツルメントの基礎を築く

～吉田源治郎の人となり福祉思想③～

本稿は三誌完結の第三誌です。

これまで、四貫島セツルメントの特徴や賀川豊彦(以下、賀川とする)と吉田源治郎(以下、吉田とする)の関わりについてみてきました。この最終回では、吉田の福祉思想と人となりを中心に述べることにします。

吉田はどんなセツルメント観をもって仕事をしていたのだろうか。彼は言っています。「セツルメントは、あくまでも人格的教育的社会事業であるべき——」と。貧しい人たちにお金を援助することだけが福祉ではない。その人が生きる力、働く意欲を持てるようにエンパワーメントを分ちあうことこそが、セツルメントの本質だということです。彼の言葉に、「建物でもなく、財力でもなく、設備でもなく、それらのすべてを超えて、人情を中心として教育的な作業を中心とする事業である」とあります。この言葉がそれを裏付けています。

また、こんなことを言っています。「私はよく聞かれる。セツルメントは何をなすべきかと、何をなすべきか。まづ、人を得よ——」と。「そしてその人を地域に住ませよ」と書き、さらに「近隣小社会と何らの有機的協同のない、一方的な慈善的施設であってはならない」とも言っています。この言葉から読みとれるのは、よき働き人を得ること、その人物を介しつつ展開される人間改造教育主義であり、地域との有機的で積極的な関係構築の重視です。

吉田が使っている言葉に「セツルメント家族」という変わった言葉があります。いわばマネージメント像です。「多様な、豊富な総合的な経験、能力及び企画というの(セツルメント)家族」に有ってほしい特性である」と……。つまり、総合的に物事をとらえ、企画力を持った人が必要で、その人物を中心に様々なフ

ミリーをつくり、そのチーム特性を生かしながら、教育活動、地域活動を展開していく、そのような仕事観を持っておられたように思われます。

また吉田は、セツルメントの発展には3段階あると言っています。「セツルメント事業の発展を見ると(中略)その第一期は救済事業を主とした時代、第二期は教育事業を主とした時代、第三期は組合運動を主とした時代(中略)である」と書き、「神戸のそれは救済を主とし、大原のそれは教育を主とし、東京のそれは協同運動を主としている」と。セツルメントの多様性を容認しつつも、賀川思想を反映したセツルメント観をのぞかせています。

吉田はさらに、セツルメントの使命について、「セツルメントの特殊な方法とは、無組織社会に対して、組織を与える事業である」とも述べ、組織化活動、すなわちオーガナイゼーションの必要性にふれています。これに関連し、セツルメントの新しい対象として、極めて貧困な人は対象でなく、自力で問題を解決し、運動の担い手になるような人こそ支援すべきだ——といった見解を覗かせています。

最後に、吉田の人となりについてふれておきます。吉田の生涯を貫いている生き方は、賀川精神の体現者、継承者ということですが、それとともに、労働者を含む人間の魂の究極を重視し、キリスト教伝道を中核に据えていこうとする生き方だと思います。また、セツルメントの思想である「人間関係、対人接触」を重視していた点です。事実、生涯にわたって吉田の社会的・人間的なつながりも広く、1982(昭和57)年に92歳で亡くなりますが、葬儀の参加者が1000人を越えたとの記録

があります。

加えて吉田は、天文学に明るかったことです。1922(大正11)年には、「肉眼で見える星の研究」を出版しています。宮沢賢治が『銀河鉄道の夜』を書いたのが1923(大正12)年ですから、吉田の本が宮沢賢治に影響を与えたとの説があります。この本は、日本のアマチュア天文家執筆の最初の天文書と言われています。吉田は、大阪市社会福祉協議会のある上本町六丁目の敷地にあった「ラッパ女学校」で、非常勤の講師をしておりましたが、夏のキャンプでは、必ず星の話をしたという逸話が残っています。

吉田の性格について、妻の幸がこう言っています。「うちの主人は常識はずれ」だったと。身の回り的一切構わず、礼拝説教のときネクタイを2本して登場していたりしたこともあって、少し変わった一面があったようです。

吉田源治郎研究の一人、三重大学の尾西康安先生は、吉田のことを「教会を敬み、教会の会衆から慕われ、信念を曲げない強さを持ち、社会的弱者へのまなざしを失うことはなかった」と言っています。

吉田は、深い信仰心に基づき、底辺への暖かなまなざしを持ち続けながら、社会的平等への静かな抵抗を極めた生涯だったといえます。

吉田著の「米岡天文台の印象」には、謝美歌などの作詞で知られている由木謙先生の「浮世」が巻頭をかざっています。星の好きだった吉田の人となりや、その清らかな歩みと重なるものがあります。総合して終わりとします。

「星よ、私の好きな星よ、晴れた姿を見せてくれ、くらぬ光、一日見れば、暗い想いは消え去るものを——」

星よ、私の好きな星よ、夜ええ鐘を向けてくれ、輝く光、胸に照れば、胸はたちまち晴れるものを——」

※この稿は大阪市社会福祉研究・情報センターで開催された「大阪の歴史市民講座」の講演(講師：岡本榮一 大阪ボランティア協会理事長(現ボランティアズム研究所所長))の録音から抜粋したものです。

今回は「補遺9」として、連載で何度か登場した高山徳太の小学生の時につくった作品が、昭和23年8月に世界文学社より『高山徳太詩集：花のように』として出版していたことが分かり、最近その詩集を手することが出来た。その作品を2回に分けて紹介して置く予定である。

(2010年11月30日記す。鳥飼慶陽) (2014年11月10日補正)

KAGAWA GALAXY 吉田源治郎・幸の世界（143）

第143回 「吉田源治郎・吉田幸の世界」補遺（9）

「補遺9」は、連載で何度か登場した西宮一麦教会の高山徳太が、当時小学生の時に作った作品が、『高山徳太詩集：花のように』という著書として出版されていたことが分かり、最近それを入手することができた。

手にとってこれを読み、改めて徳太君の詩に驚くと共に、これを京都の世界文学社が立派な詩集として編集し、昭和23年8月に世に送り出した事の詳細もよく理解出来た。

今回は、この高山徳太詩集の中から、幾つかの作品を紹介し、次回の「補遺10」として、詩集の「あとがき」にある賀川豊彦や徳太の母、そして徳太の通う小学校の教師や最初新聞に紹介した記者の言葉が収められているので、それを入れて置きたいと思う。

以下、詩作品を切り抜いて、それをここに詰め込んでいる事をお許し頂きたい。



なずなのお花

なずなのお花が
十字架つけて
小川のふちで
お祈りしてる
お耳をすませば
きこえるでしょう
どじょうやめだかに
お説教してる
だれでもみんな
神様の子よ
やさしい心で
くらしませうと

みの虫さんのおうち

だれに聞いたの
みの虫さん
そんなべんりな
うちたてて
雨がよっても
しらんかお
風が吹いても
しらんかお
お日傘はかばか
てる日だけ
お首をだして
こんにもは
たべるはっぱが
なくなるよ
おうちをしよって
おひっこし
外から見ると
きかないが
中はびかびか
りっぱだね

お花ばたけ

お花ばたけの
午さがり
じつとききましょ
お話を
お花とお花の
お話を
お花と小虫の
お話を
お日さまお花に
はなしてる
風さんお花と
はなしてる
お耳すまして
きいてたら
僕もお花に
なれそうよ

泣いているのは

泣いているのは
だ——れ
お花よ
お花
わるんばに
むしられて
すてられた
お花

小鳥の歌

レコードやめて	聞きましょよ
お空の外の	鳥の聲
ペーターマンも	いいけれど
僕にはまだまだ	わからない
小鳥の歌は	神様の
お作りなされた	音楽よ
お空や雲や	風や花
目には見えない	しあわせを
心の中の	しあわせを
小鳥のうたは	おしまます
母さんおねじを	まわさずに
小鳥の音楽	聞きましょよ

雲

生れたばかりの
 赤ちゃん雲を
 風がさらって
 かけて行く
 ところもおうちも
 母さんさえも
 知らずに大きく
 育ったら
 広いお空の
 すみからすみを
 たずねたすねて
 行くでしゅう

草の芽

めじるしつけて
 見ていたら
 きょうは一ミリ
 ほどのびて
 青いお空に
 息をする
 神さまの子よ
 草の芽は
 小さいけれど
 生きている

お空

お空は青くて
 ふうかくて
 海にもいない
 魚がいて
 みない人には
 みえないの
 心のおめめで
 みる人に
 いつも光つて
 おどつてる

ねんね
 小さい子供が
 母さまの
 やさしいお胸で
 ねるように
 蜂はお花の
 ふところに
 お虫は土の
 ふところに
 土は地球の
 ふところに
 地球はいつでも
 神さまの
 やさしい大きな
 ふところに

雁
 一聲鳴いて星の空
 二聲鳴いて北の方
 姿も見えずに飛んで行く
 雁、雁、お前はもう来たの
 だれだれきたのつかれたろ
 おみやは何だかあてようか
 お荷物おろしてはよ休め



石ころ
お花のように
きれいな
ちようちようさんも
来るでしょう
みつばちさんも
くるでしょう
だけどきたない
石ころは
ふまれてけられて
みちばたの
草にかくれて
泣いている

ありがとう
世界をきれいに
するために
お花をたくさん
ありがとう
贈い晩には
ピカピカと
やさしいお星を
ありがとう
僕にはだいな
母ちゃんを
神様ほんとに
ありがとう

春の野原
うさぎの草をつみながら
野原の小道を歩いてゆくと
よもぎが顔をもちあげてる
うすむらさきのいねふぐり
おらんだからんだみみながら
小さく風にゆれている
小川の中をのぞいてみると
水はさらさら光っておどる
めだかもひとはねものかげで
ゆらゆらりと尾をゆする
ざしざしの葉をつみながら
そっとのぞいた草かげに
つくしのぼろやが顔をだし
はすかしそうにはにかんだ
光は静かにおどります
春の野原のお昼すぎ

まはう
まはうのランプがあつたなら
でろ でろ でろ でろ
母さんの
黒いきれいな洋服
まはうの指輪があつたなら
でろ でろ でろ でろ
紙紙の
甘いおいしいチョコレート
まはうの杖があつたなら
でろ でろ でろ でろ
なつかしい
にこにこ笑顔のお交棒
まはうのかばんのふたあけて
でろ でろ でろ でろ
しあわせが
どの子の家にもくるように

以上は、『高山徳太詩集』の中の一部を抜粋したものである。

今回は詩集の「あとがき」に記されているものを収める。

(2010年12月1日記す。鳥飼慶陽)(2014年11月11日補正)